◎新潟福祉文化を考える会現場セミナー

「ドナルド・キーン・センター柏崎　研修報告」

～越後柏崎の名誉市民　ドナルド・キーン（鬼怒鳴門）から学ぶ～

関矢　秀幸（新潟福祉文化を考える会　　前日本福祉文化学会理事）

私の住む柏崎に、ドナルド・キーン・センター柏崎が開館したことは知っていたが、「何故柏崎に？」「キーンさんってどんな人？」など恥ずかしながら詳細は判らなかった。何回か、個人的に、ＰＴＡの研修等で見学しているが、今回初めて、気合を入れて、キーンさんの全体像を知るために、ビデオ上映から、展示まで詳細を学ぶ機会とした。参加者は新潟福祉文化を考える会の研修として、渡邊理事、五十嵐（真）理事、五十嵐（勝）氏そして私の四名である。終了後は五十嵐勝氏宅へ戻り、日本福祉文化学会の総会にＷＥＢ参加をした。

（蘇った弘知法印御伝記（こうちほういんごでんき））

柏崎とキーン先生のご縁は「古浄瑠璃　弘知法印御伝記」の柏崎上演から始まる。元禄時代に浄瑠璃本として海外に持ち出され、数奇な運命をたどってきた浄瑠璃があった。ゆかりがある新潟県で、地元で結成された越後猿八座によって、300 年ぶりに舞台に復活したのが「弘知法印御伝記（こうちほういんごでんき）」である。話は 1962 年にさかのぼる。浄瑠璃研究の早稲田大学名誉教授の鳥越文蔵さんは、ケンブリッジ大学で教えるために英国に渡ったとき、「大英博物館にえたいの知れない古い本がある。みてほしい」と現地の研究者に頼まれた。それが、浄瑠璃の台本に絵をつけた、数点の浄瑠璃本だった。保存状態はよく、しかもその一冊「越後国柏崎　弘知法印御伝記」は、日本では現存が確認されていないものだった。それから 40 年。鳥越さんの友人で日本文学研究者のドナルド・キーンさんは、文楽で三味線弾きをやっていたが新潟にもどっていた鶴沢浅造さんから「新潟で人形浄瑠璃をやりたい」と相談された。地縁があって面白い、古い浄瑠璃の復活をすすめた。浅造さんは鳥越さんの上演許可を得、キーンさんから越後角太夫と名前もつけてもらい、佐渡の文弥人形の人形遣い西橋八郎兵衛さんとともに、越後猿八座を立ち上げた。一般から募集、20 代から 60 代の男女が加わり、座員は総勢 18 人。こうして浄瑠璃は、2009 年 6 月に柏崎市で蘇った。

□演目内容紹介

自らの遊びがもとで、妻が殺され、息子たちと別れた男が即身仏になるまでの物語。14 世紀に即身仏となって、いまも長岡市の西生寺に安置されている弘智法印がモデルだ。日本橋堺町で説経浄瑠璃をしていた江戸孫四郎が、年代など大きく変えて物語にし、貞享 2（1685）年ごろに舞台にかけたらしい。近松門左衛門が活躍する以前の「古浄瑠璃」は、英雄や昔話、高僧などの物語が多く、地方のあまり知られていない僧の話は珍しく、貴重な浄瑠璃である。海外には、ドイツ人医師ケンペルが持ち出したようだ。ケンペルは、元禄時代に長崎のオランダ商館で働き、オランダ人一行に加わって二度も江戸に旅し、徳川綱吉に謁見（えっけん）している。1692 年に離日するとき、船の積み荷の下に「日本の印刷したものや手書きの資料」を隠したと日記にある。彼の資料類はのちに大英博物館にまとめて所蔵されたが、浄瑠璃本は中国の歴史書と勘違いされたのだ。

（何故柏崎にキーン・センターが？）

2011 年の東日本大震災で被害を受けた方々が懸命に生きる姿に、キーン先生は「今こそ私は日本人になりたい」「この人々と共に生き、共に死にたい」と日本での永住を決意され、2012 年 3 月、帰化申請が受理され日本人となる。日本国籍取得後の正式名はキーン ドナルド。雅号「鬼怒鳴門」を使うこともある。キーン先生の日本永住を機に、古浄瑠璃上演などで親交のあった柏崎の公益財団法人ブルボン吉田記念財団が、ニューヨークのご自宅にあった多くの貴重な資料や書籍などの寄贈を受け、2013 年 9 月に「ドナルド・キーン・センター柏崎」が開館された。これにより、キーン先生は、日本文学の興隆に不断の研さんを重ね、著名な功績を表されるとともに、柏崎市民の情操ならびに文化の向上に著しく貢献をされたことから、柏崎市は、2014 年 7 月 1 日に特別表彰し、名誉市民称号第 1 号を授与した。

（キーン氏のプロフイール）

1922 年ニューヨーク生まれ。日本文学研究者、文芸評論家。コロンビア大学名誉教授。1940 年（18 歳）、アーサー・ウエーリ訳『源氏物語』に感動。以来、日本文学や日本文化の研究を志し、第二次世界大戦後、コロンビア大学大学院、ケンブリッジ大学を経て 1953 年に京都大学大学院に留学。アメリカ帰国後、コロンビア大学で日本文学を教えながら日本に足繁く通い、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫など名だたる作家と交流を深めながら古典から現代文学にいたるまで広く研究し、海外に紹介。日本文学の国際的評価を高めるのに貢献。1962 年に菊池寛賞、1983 年に山片蟠桃賞、国際交流基金賞を受賞。また日本人の日記を研究した『百代の過客』で読売文学賞、日本文学大賞（1985 年）を受賞。1986 年、コロンビア大学にドナルド・キーン日本文化センターを設立。2002 年には文化功労者、2008 年には文化勲章を受章。
主な著書として『日本文学の歴史』18 巻、『明治天皇』など。また、古典の『徒然草』

や芭蕉の『奥の細道』、近松門左衛門、現代作家の三島由紀夫、安部公房などの著作の英訳書も多数。キーン氏は、2019年（平成31年）2月24日6時21分（JST）、心不全のため東京都の病院で死去。96歳没。日本をこよなく愛した文学者の死は、大きく報じられた。叙従三位。2020年（令和2年）1月8日、養子のキーン誠己は、ドナルド・キーンの命日2月24日を「黄犬（キーン）忌」と名付け、キーンを顕彰するイベントを毎年開くことになったと発表した[70]。自宅近くの寺にある墓標にも幼少期に飼っていた愛犬の黄色いイラストともに「黄犬」の文字が刻まれている。キーンは、ニューヨークと東京に半年ずつ交互に棲む生活を約35年間続けていた。

（太平洋戦争と日本語との出会い）

1940年（昭和15年）のある日、ナチス・ドイツのフランス侵攻など、欧州情勢に鬱屈とした日々を過ごしていたキーンは、タイムズスクエアで売られていたアーサーウエイリー訳『源氏物語』を手にとった。本の厚さに比して安価だったというだけの理由で49セントでこれを購入したキーンは、やがてその世界に魅せられるようになる。その後も反日感情を持つ者への遠慮から日本語は学ばなかったが、ジョージ・H・カーの誘いを受けて、ポール・ブルーム（後:CIA初代東京支局長）とともに有志による日本語勉強合宿に参加。サクラ読本を教材にして日系アメリカ人の猪俣からレクチャーを受けた。合宿を終えたあとも、最初に愛着を覚えたフランス文学にうちこむか中国語と日本語の研究を続けるかキーンには迷いがあったが、フランス出身のブルームから「フランスで育って完璧なフランス語を話すアメリカ人は山ほどいる、しかし日本語がわかるアメリカ人は皆無に近い」と説得された。大学では、カーの勧めにより角田柳作の日本思想史を受講し、日本研究の道に入る。

（日本語通訳官として戦地従軍）

キーンは海軍情報士官としてハワイの翻訳局に赴任し、日課の報告書や物資の明細書などのガダルカナル島の戦いで得られた日本軍の文書を英語に訳す任務を負った。中には死亡した兵士から押収された日記もあり、くずし字を習得したキーンは好んで翻訳した。最期の思いが赤裸々に綴られた手書きの文書を通じてキーンは日本人の心に接した。通訳官として尋問した最初の捕虜は、のちに作家となった豊田穣であった。

（日本軍軍医のいたずら）

その後オーテス・ケーリ（後:同志社大学名誉教授）とともにアッツ島の戦いに参加する部隊に同行。初めての実戦経験となる。アッツ島では激しい抵抗を見せながらも最後には集団自決で果ててしまう日本兵たちに、キーンは困惑する。続いてコテージ

作戦にも参加し、キスカ島上陸部隊の一員に加えられる。実際にはキスカ島撤退作戦により日本軍はすでに島を去っていたが、キーンのもとに持ち込まれた"標識"は大騒動をもたらし、大量の血清を求める緊急電が本国に向けて打たれた。その看板には『ペスト患者収容所』と日本語で書かれていたのである。キーンがこれが日本軍の軍医によるいたずらだったと知ったのはそれからかなり時間が経ってからのことであった。

（神風特攻隊との遭遇）

1945 年（昭和 20 年）には、沖縄攻略作戦に従軍。沖縄本島へ向かう途上、乗艦していた輸送船が神風特別攻撃隊の標的となるが、特攻機は突入直前に別の船のマストに接触して水中に墜落し、命拾いした。上陸初日に接触した現地住民とは意思疎通ができず、沖縄にいるうちの多くが日本語が和者でないことを知った。その日の遅く、日本語を上手に話す少年が見つかり、彼を通訳にしてガマに潜む住民に投降を呼び掛けた。陸軍の第 96 歩兵師団が語学将校を求めていることを知るとこれに志願。主に普天間に駐留して捕虜の尋問を担当し、前線ではスピーカーで投降を呼びかけたが、勝ち目がない中で日本兵や民間防衛隊が自爆攻撃を行い、女性や子どもが自殺する姿を目の当たりにした。沖縄での軍務は 7 月まで続き、終戦の玉音放送はグアムの収容所で日本人捕虜とともに聞いたと言う。

（赴任地を偽って日本上陸）

日本のポツダム宣言受諾後、キーンは日本に赴任することを望んだが、折り合いが悪い上官によってこの願いは聞き届けられず、第 6 海兵師団として中国に派遣されることとなった。赴任先の青島では当初現地の日本軍人と良好な関係を築いたが、まもなく混乱に乗じた腐敗や密告が入り乱れるようになり、戦争犯罪の取り調べなどに嫌気が差したキーンは帰国願いを出し、原隊復帰の命令書を得てこの地を後にした。

帰路、厚木飛行場を経由したキーンは、初めて訪れた日本を見て回りたい衝動を抑えられず、原隊の現在地を横須賀と「誤って」報告。横須賀の司令部に出頭し、自分が「誤解」していたと申告するまで、1 週間にわたり滞在し戦後間もない日本を堪能した。

（キーン氏から学んだこと）

キーン氏は、日本人の特徴として、次の 5 点を挙げている。①あいまい（余情）

②はかなさへの共感。③礼儀正しい。④清潔。⑤よく働く。以上をまとめて「私はだいたいにおいて日本は良い方に来たと思います」としながらも「自分たちの伝統に興味がないということは一つの弱点だと思います。」としている。また、日本の皇室制

度については高く評価し、自らも面識がある明仁天皇（現上皇）美智子皇后（現上皇后）について、両陛下は天皇と皇后である前に、最高の夫婦だと思います。いろんなしぐさにお互いへの愛情を感じます」と述べている。

まさに、日本人よりも日本人らしい心根をお持ちになっていた方であり、青い目の日本人が私のふるさと柏崎に根をおろしていてくれたことに感謝至極である。

太平洋戦争従軍時に、死にゆく日本兵の遺書、そして面会から日本語に没頭されていくお気持ちは感慨深いものがある。

日本に帰化し、柏崎の名誉市民となって、日本で生涯を閉じた「鬼怒鳴門」キーン・ドナルド氏から「日本語を日本人をそして日本の繁栄を」学ぶことができた。